上野彦馬とその時代

姫野順一

⑰ 高島炭坑

世界遺産 往時の雄姿

日本大写真学科は彦馬の私家版アルバム2冊を所蔵している。彦馬の没後、息子陽一郎から長崎の富豪永見徳太郎の手に渡り、さらに山端祥玉（長崎原爆直後の写真を撮った山端庸介の父）、写真家の名取洋之助、サンニュース社、岩波映画と所有者が移り変わり、現在の日大所有となった。

それまでの保存状態が悪く、傷みがひどいが、明治初期の彦馬が自分で所有した記録写真集として貴重である。着色人物、中国人、長崎風景、高島炭坑、金星観測、西南戦争、ロシア軍艦と乗組員の大判写真が混載されている。

高島炭坑の大判写真は4カットである。長崎大附属図書館は写真①と同じ紙焼き写真を所蔵している。これは彦馬の一番弟子内田九一の旧蔵であったが、彦馬は九一にこの記録写真の紙焼き複製を提供したようである。

①高島炭坑南風泊　明治5～6年　上野彦馬撮影（以下、日本大学写真学科蔵）

東京で随一の写真家とうたわれた九一は、明治5（1872）年7月、天皇巡幸に随行して長崎市街を撮影した。長崎上陸は正味2日であったから、多くの機材を要する高島炭坑の野外撮影は九一には無理である。

長崎港口の高島炭坑は、この頃、トーマス・グラバーから後藤象二郎の手に渡り、外国人の鉱区所有を禁止する日本坑法の準備のなかで公収の調査が進められていた。工部省から写真撮影を打診された九一は、彦馬に協力を求めたものと思われる。

採掘された石炭は北渓井坑の坑口から人力で約150㍍離れた南風泊の港口に運ばれ、桟橋に敷かれた2本のレール先の穴から、下に潜り込んだ石炭運搬船に落下された。船の艫（とも）は「榮力丸」と読める。石炭運搬船にふさわしい名前である。左に立つのは、グラバー商会の倒産後オランダ貿易会社に鉱山監督として雇われた、英鉱山技師フレデリック・ポッターと同僚である。背景は左が伊王島、右が飛島である。

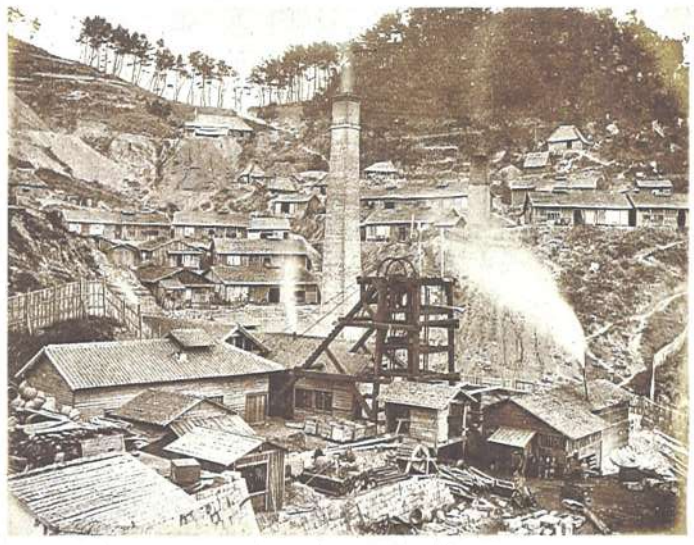
②高島炭坑北渓井坑

写真②は明治2（1869）年4月に開坑した稼働中の北渓井坑である。宝永年間の1710年ごろ、平戸から来て深堀藩の下僕となった五平太が、この地で「燃石」を発見し、鍛冶燃料や塩田に売りさばいたことから始まった。高島炭坑は、江戸時代深堀藩の領地であった。慶応4（1868）年4月から、佐賀本藩とグラバーの合弁により近代的な蒸気機関による西洋式炭坑が開発された。

イギリス人技師サミュエル・モーリスの施工管理により、棟梁（とうりょう）古賀治左衛門（月俸100両）、その部下荒木丈作、井手与八（60両）、機械方頭取・橋本清三郎（50両）、機械方・荒木庄之助、大田忠蔵（30両）、機械方・幸太夫、元吉ほか1名、大工儀八（20両）と、イギリス人機械方・惣心遣（監督）ウヲールト、日雇小頭ハレント、炭掘出方2名が建設工事にあたった。

中央の櫓（やぐら）下が立坑で、地下150尺（45㍍）から石炭を引き揚げる揚巻機が確認できる。煙突からは石炭を焚（た）く煙が立ちのぼり、作業機に接続する蒸気釜から蒸気が噴き出している。立坑から引き揚げられた石炭は、箱型4輪の炭車に積み込まれ、レールの上を人力で港に運ばれた。日産300㌧。炭車は1㌧の石炭を運ぶことができた。

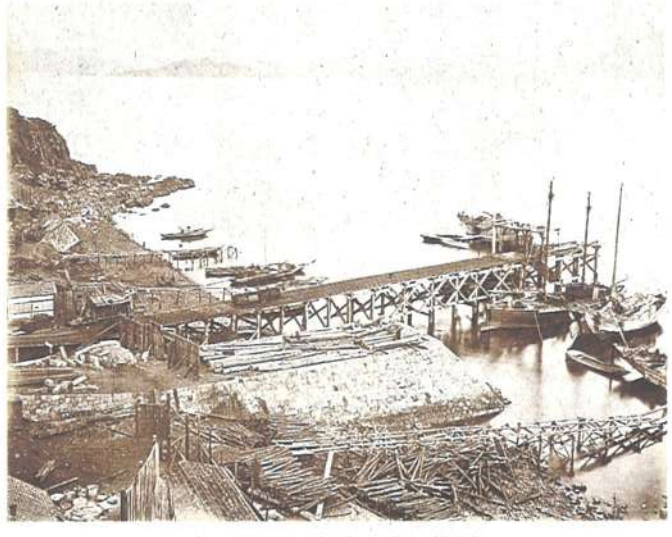
佐賀藩の開発責任者松林源蔵の報告書には「掘進にツルハシと火薬、蒸気の捲揚機、排水は、はじめは水車、のちに蒸気ポンプ、通気は扇風機と風穴、照明はランプと安全灯を使用」したと記録されている。産業革命遺産として世界遺産に認定された根拠である。現在は坑口跡だけが残る。



③稼働中の南洋井坑

写真③は南洋井坑である。埋め立てで拡張する前の高島で、狭い島の南部に第2次事業として138尺（41㍍）が掘削され、明治4（1871）年4月に開坑した。北渓井坑に比べると巻揚機や煙突の規模が大きく、炭坑住宅（納屋小屋）が立て込んでいる。この井坑は亀裂が生じたため、明治25（1892）年に閉坑となった。跡地の長崎市南消防署高島出張所の側には、排気坑跡が残されている。

写真④は南洋井坑から東約100㍍の海岸に突き出した尾浜の石炭積み出し桟橋である。3本のレールが敷かれ、石炭は連結された炭車で、待機する石炭運搬船に運ばれた。桟橋上に木枠が組まれ、石炭は木組みから張られたロープに吊られた板に滑らせて船に流し込まれた。北渓井坑に比べると技術の進歩がうかがえる。人は先端の浮桟橋から船に乗り降りした。



④尾浜の石炭積み出し桟橋

両井坑は、明治6（1873）年12月に明治政府が後藤の債務を肩代わりし、オランダ貿易会社およびオリエント・バンクに計40万㌦を支払い、公収された。岩崎弥太郎に経営移管されたのは明治24（1891）年のことである。

（長崎外国語大特任教授）

長崎新聞 2024（令和6）年11月17日掲載